

04

## 外国につながる子どもたちの学習支援と

### 居場所づくりの取り組み

— IKUNO・多文化ふらっと (大阪市生野区)  
— Minamiこども教室 (大阪市中央区) の事例から

岩男望 (京都大学農学研究科博士後期課程)

## はじめに

日本ではたらく外国人の家族である子どもたちは、どのような状況にあるのだろうか。外国につながる子どもの多い大阪市内で、そのような子どもたちの学習支援や居場所づくりを行っている IKUNO・多文化ふらっと (生野区) と、Minamiこども教室 (中央区) を取材した。

## 外国につながる子どもたちの状況

日本に長く住み、家庭や学校で日本語を使いながらも、学習面で困難があるなど日本語指導が必要な外国籍の子どもたちがたくさんいる。また、外国人登録者にはカウントされない、日本国籍を持ちながらも日本語指導が必要な児童生徒も大阪府内に千人以上いる。そのような子どもたちは、国籍も、外国につながっていることについてどのように自覚しているのかも様々である。見た目や名前から外国につながっているかどうか判断できない子どもも多い。そのような子どもたちの共通点は、「自分の意思ではなく、親の事情でここに暮らしている」ということである。子どもとその親は以下のような様々な課題 (Minamiこども教室の資料・説明に筆者が追記) に直面しているが、いずれの問題にしても、決して個人の問題ではなく、社会的な問題であるといえる。

### ●教育的な課題

友人と日本語でコミュニケーションをとり、一見何不自由なく過ごしているように見える子どもでも、生活言語と学習言語が違うために学習面で困難がある場合が多い。例えば数学の力はあるのに、日本語の文章を読み取る力の問題で文章題が解けずに算数の学力が伸び悩んでしまうことがある。このような問題は、学力上の問題だけでなく、学校への適応の遅れ、不登校、進学上の困りごと

の増加にもつながる。

他にも言語にまつわる課題として、日本語習得が不十分かつ母語の使用能力も限られる、いわゆる「ダブルリミテッド」の問題も大きい（荒牧ら 2022）。また、日本語が十分に理解できない子どもが、言語の理解の問題と知能の発達の問題とを混同されて発達障害とみなされる傾向もある（毎日新聞取材班 2020）。

### ●社会的な課題

学校や地域社会で、「私たちとは違う」という目で見られ、差別や偏見によって傷ついた経験をもっている子どもが非常に多い。そのような社会関係はアイデンティティの形成に影響を与えたり、アイデンティティの揺らぎにつながったりする。

### ●経済的な課題

不安定な雇用状況など経済的な困難を抱えている世帯が多い。保護者は、子どもに愛情を持ち将来を考えれば考えるほど、子どもを置いてでも仕事に出なければならないという現実がある。また結果的に上の子どもに下の子どもの面倒を見させることになり、ヤングケアラーを生んでしまうということが往々にしてある。

さらに、子どもたちが様々な体験（旅行や習い事、他者との交流など）をする機会が限られてしまう状況（「経験の貧困」や「体験格差」などと呼ばれる）にもつながる。

### ●法的な課題

在留資格、国籍、婚姻、親権の問題など、法的な課題をいくつも抱えている人々もいる。

### ●家族関係の課題

親が先に来日して後から子どもを呼び寄せる場合、母国と日本を行ったり来たりする場合、また、より良い生活を求めて日本の中で移動を繰り返す場合など様々な家庭がある。そのような落ち着かない環境の中で、親子関係が潤滑に行かなくなってしまう

うことも多くある。日本の文化や言葉になじむスピードが子どもと親で異なるために生じるギャップもある。家庭内で子どもが日本語への通訳を担うことになる場合も多く、その負担について考慮する必要もある。

## I IKUNO・多文化ふらっと\_\_ 生野区

### 1. 生野区の概要

生野区の人口は約 12 万 7,000 人。そのうち 23% の 30,000 人弱が外国籍を持ち（市町村単位での外国籍住民割合は全国 1 位）、約 80 カ国のルーツを持つ人々が暮らしている。在日コリアンの集住地域であることに加え、中国やベトナムにルーツを持つ人々が多く近年はネパールやミャンマーから来る人々も多い。

### 2. いくのコーライブズパーク（いくのパーク）

大阪生野コリアタウン近くに位置する多文化共生のまちづくり拠点である。少子化に伴う学校再編計画により、2021 年の 3 月に閉校した御幸森小学校の跡地に 2023 年にオープンした。IKUNO・多文化ふらっとは、株式会社 RETOWN と共同事業体を組んでその跡地の管理運営を行っている。



いくのパーク  
（画像出所）IKUNO・多文化ふらっと提供。



いくのパーク/レストランやダンススクール、一時預かり保育施設など、様々なテナントが入る

### 3. IKUNO・多文化ふらっと (以下ふらっと)

2019年に任意団体として設立、2020年に特定非営利活動法人格を取得した。子どもの居場所づくりと学習支援をおこなう「こどもみらい事業」と、主にいくのパークを拠点として多文化共生のまちづくりを行う「まちづくり事業」の2つの事業を実施している。職員数は14人、登録ボランティア(有償・無償)は約250人、関連団体は約100団体である。事業の財源は助成金と、テナントの家賃収益などの事業収入によりまかなう。

多文化共生のまちづくりを目指して、様々な事業に取り組む中で大事にすべきことを確認し、かかわる人々と共有するためのビジョン・ミッション・タグラインが以下のように掲げられている。ビジョン「誰もが自分と社会の可能性を信じることができ、生き続けたいと思える社会」/ミッション「境界を編みなおす」/タグライン「『どうせムリ』から『できるかも』へ。」。

### 4. こどもみらい事業

居場所・学習支援事業：小学生 DO-YA (どおや) / 中高生 DO-YA (どおや)

いくのパーク内で実施されている、子どもたちの学習支援・居場所づくり事業が「DO-YA(どおや)」である。「DO-YA(どおや)」という名前は、子どもたちに「どや、私すごいやろ!」「できんねんで!」「わかんねんで!」と胸を張って言えるものを見つけてほしい、という思いから名づけられた。

元はNPO法人クロスベイスが2017年にコリアタウンで始めた学習支援活動であったが、途中からふらっとと共同開催になり、今年度からは完全にふらっとに移管された。対象は、小学生から高校生で、口コミや学校からの紹介、多言語相談の場をきっかけにつながってやってくる子どもたちが多く、学習支援事業を進める過程で、日本語学習のニーズのある子どもが増えてきたために日本語学習プログラムが別に設けられたが、現在ではDO-YA内に組み込む形で行っている。学習支援事業(中高生DO-YA)の利用者のルーツの国の割合は、中国44.4%、ネパール22.2%、日本9.7%、韓国朝鮮8.3%、ベトナム8.3%、フィリピン6.9%と、外国ルーツのある子どもたちの割合が多い。居場所・学習支援事業の1年間の延べ利用者数は約7,000人である。



DO-YAの様子  
(画像出所) IKUNO・多文化ふらっと提供。

## 小学生 DO-YA

水曜・木曜・土曜の14:30から17:20に小学生を対象に実施している。学習支援よりも居場所づくりがメインで、地域の子どもたちが来て自由に遊び、その中で宿題に取り組む子どもがいるというような場になっている。一対一の学習支援が必要であれば中高生 DO-YA で対応する。

## 中高生 DO-YA

月曜・水曜・木曜の17:30から19:00、19:20から20:50に実施している。1コマ90分という区切りを設け、1対1や1対2で講師が子どもたちについて宿題を一緒にやったり、日本語学習を行ったりする。近年は、日本の中学校に在籍していないけれども日本の高校入学を目指す年齢超過の子どもの人数も増えてきており、そういった受験（いわゆる「ダイレクト高校受験」）のサポートも行う。

講師には責任を持って子どもたちを継続的に見てもらいたいということと、若いボランティア講師を支えるという意味から、有償ボランティアとしているため、子どもたちからは受講料を受け取っている。中学生は1か月10,000円（週一回）で大阪市の塾代助成金事業で実質無料となる。高校生は、助成金事業がないため1か月5,000円（週一回）としており、自分でアルバイトしたお金で来ている子どもたちもいる。

特に参加する子どもの居住地は限定していないため、大阪市内の他の区から来る子や、中には枚方市から来る子もいる。子どもの学習支援を行う場が多く地域で近隣にないということがわかる。距離的な問題などで通うことが難しい場合にはオンラインでも対応している。

## ボランティア講師によるかわり

講師を担うのは事務局スタッフと有償のボランティアである。ボランティアは、大学生（もともと学習支援に通っていた子もいる）、社会人、元教師など様々である。子どもたちとボランティア講師のマッチングは、子どもたちのニーズや講師の強みをもとに事務局が調整し、基本的には担当を固定して継続した学びを可能にし、関係性を築けるようにしている。

ふらっとでは、ボランティア養成講座を年に2回行っている。他の団体や学校で子どもたちの学びをサポートできる人が増えるように、一般に開放して実施している。小学校や中学校の先生、また、大阪市外からの参加も多く、学校などで外国ルーツの子どもたちの学びをサポートするための研修が十分に整備されておらず、ニーズがあることがうかがえる。

なお、大阪市では、小学校4年生から中学校3年生まで日本語指導が必要な子どもの教育のセンター校として小・中学校17校が指定されており、通級方式で、週2～3回、一回2時間程度、概ね1年間の日本語学習支援が実施されている（山本・榎井2023）。しかし、近年外国につながる子どもの人数の増加に追いつかず通級回数も週1回になり、1人当たりにかけられていた指導時間数が減ってしまっている。また、外国ルーツの子どもが散在している地域では、担任の先生に一任されてしまうような、大阪とはまた違う困難がある。

## 「歓待」される居場所として

学習のベースとして、同じ母語を話す友達や先生と喋ることができるなど、子どもたちが安心して来ることができる場所であること、信頼できる人がいる環境であることが意識されている。そのため、遊んだり、

カップラーメンを食べていたりする子もいるが、時間をどんなふうに過ごすかも子どもと一緒に決めて、自己決定を尊重するように心がけている。

中には家庭内の問題など、シビアな環境に置かれている子どもも多く、悩み事や相談ごとができる場所であることも大事だと考えている。講師は、自分の担当している子どもだけではなく、同じ空間にいる子どもたちの様子を見たり、月一回のミーティングへ参加したりすることで、そのような子どもたちの様子について情報共有している。子どもたちの悩みごとに対しては、「隣にいて、話聞かっていうことぐらいしかできない」ことも多いが、だからこそ、子どもたちを「歓待」すること、つまり「来てくれてありがとうと、喜んで迎え入れる」姿勢が意識されている。

## 体験活動 DO / CO

キャンプや農作業体験、大学のオープンキャンパスへの参加などの体験活動も定期的に提供する。外国ルーツであることや、経済的な理由から、家と学校以外の場所をよく知らない、限られた人としか会う機会がない、という「経験の貧困」状態にある子どもも多い。いろいろな人たちに会い、いろいろなことをして、いろいろな気持ちになることができる環境を準備するのは大人の仕事であり、その中で何を選び取るか、何を感じるかは、子ども自身の力でできることだと考えている。子どもたち自身が自分の好きなものに気づいて、いろいろな世界につながるきっかけになってくれたらと考えている。外国につながる子どもたちの多くは、様々な場面で「自分は他の人と違う」という境界を感じている。その境界によって「自分にはどうせ無理だ」と感じさせられる経験が重なると、どうしても失敗するこ

とを恐れて新しい場所に踏み出すことができなくなってしまう。様々な体験を通して、「いっぱい失敗しても大丈夫や」という経験をして、「これ面白いかも」と思う機会を重ねることが、「境界を編み直す」ことにつながることを願っている。

## いくのパークこども食堂／おにぎりてんこもり

毎週金曜日の 15:30 から 19:00 には、小学生から高校生までを対象としたこども食堂を実施している。また、土曜日に朝から図書館（後述）に来ている子どもたちの「おなかすいた」という声にこたえて、昨年度から土曜日にも「おにぎりてんこもり」というおにぎりを提供するプロジェクトを始めている。

## 「どっちが先生かわかれへん」支援の境界を編み直す

学習支援事業の様子を見た人からは、よく「どっちが先生でどっちが学生かわかれへん」と言われるという（実際、取材時もわからなかった）。これは、子どもと講師が一緒に考えて勉強するという DO-YA のスタンスを象徴している。ボランティアからは、「活動に関わることで、自分が救われている」「自分にとっても欠かせない活動になっている」という声があり、「支援してあげている」という感覚がないところが、ふらっとの魅力となっている。

また、学習支援を受けた側が、その後教える側に回ることが最近多くなってきた。例えば学習支援を受けている高校生に、夏休みに外国ルーツの小学生の宿題サポートをやりたいと話したら、参加したいと言ってくれる。サポートを受けた側が、「自分も自らの力を使って他の人に役に立ちたい」という気持ちを持つようになってくれ

ており、スタッフは子どもたちにそのような場面でぜひ活躍してもらいたいと考えている。これは学習支援に限らない。子ども食堂では高校生が小学生の面倒を見るようなことが自然発生的に生まれている。

さらに、先述の「おにぎりてんこもり」には、小学生 DO-YA に来ている子どもの保護者や、ベトナムのお母さんたち向けの日本語教室の参加者がボランティアに来てくれている。このように、活動の中で、支援する／されるという関係が固定化せず、流動的にある形が、ふらっとの目指すところであると考えている。

このような関係性が自然と構築される背景には、生野という場所が、もともと在日コリアンが多く、「自分とは異なる人とのように暮らしていくか」を考えてきた歴史的な土壌があることが影響しているのではないかと感じられている。

## 5. まちづくり事業

ふらっとでは、こどもみらい事業のほか、まちづくり事業としての取り組みも実施している。

### 農園～ぐるぐる～の運営

いくのパーク内、御幸森小学校の元学習園を活用した農園で、子どもたちの学びの



農園の様子  
(画像出所) IKUNO・多文化ふらっと提供。

場、多世代交流の場として野菜づくりを行っている。ボランティアや、農家のアドバイザーによって運営されている。収穫した野菜は月一回の朝市で販売したり、子ども食堂で使ったりしている。

### 図書室～ふくろうの森～の運営

週4回、火曜・金曜、土曜、日曜の10:00から17:00に開室している。誰もが来てゆっくりできるオープンスペースで、例えば赤ちゃんが泣いても出ていなくてもいいし（授乳・おむつ替えスペースもある）、おしゃべりしに来てもいい場所になっている。ボランティアによる絵本の読み聞かせも実施されている。多言語絵本がたくさんそろっていることも特徴である。助成金の関係でつながった企業の海外駐在員がそれぞれの国で集めた図書が並んでいる。



図書館の様子／多言語絵本  
(画像出所) IKUNO・多文化ふらっと提供。

### 防災・避難所拠点の整備

生野区西部地域は木造家屋の多さなどの理由から災害リスクが高く、いくのパークは防災拠点としての機能が求められており、災害発生時の避難所として整備されている。

### クロッシングフェス・夜市の実施

多文化共生のイベント「いくの多文化クロッシングフェスティバル」を年に一回開催するほか、今後「いくの万博夜市」を月に一回定期開催することになっている。夜市はコリアタウンのヤシジャン（夜市）と、同日開催で行うようにコリアタウンとの連携をおこなっている。

### その他のまちづくり事業

いくのパーク内の貸室の運営、外国ルーツの高校生による多言語絵本の読み聞かせ活動、コーラス活動、「いくのふらっとだいがく」（いくのパークをキャンパスに、大学と地域をつなぐ活動）、座談会やセミナーの実施などを行っている。

## 6. 今後の課題：取り組みの継続と 公民連携の必要性

事務局の藤井さんは、「一旦開いたこの場所をしっかりと継続していくことが一番大きな目標」であると考えている。さらに、昨年度生野区から受託した外国人施策に関する調査によって判明した必要とされる施策を提言・実行していくことが次の課題だと考えている。その一つが、多言語相談窓口の事業である。例えば、保育園の入所手続きの時期には、その複雑な提出書類についての相談が外国人の保護者から一気に集まった。昨年はふらっとの多言語相談員が、区役所でサポートを実施し、必要性を区に伝える役割も果たした。既存の外国人相談

窓口は、場所が遠かったり、開設期間が短期であったりすることから、「本当に困った時に、すぐに相談できる場所」とは言いがたい現状にある。また、行政文書における日本語の難しさを問題視し、生野区役所では「やさしい日本語」という概念とそれに基づく取り組みを広げてきた。公民連携で取り組みを進めるために「うまく私たちを使ってもらえたらいいな」と思っているという。今後外国人住民が増加する中で、このような課題はどの自治体も抱える問題である。生野区は先進事例といえ、そのような意味でもこの事例から学ぶことはたくさんあるだろう。

## II Minami こども教室\_中央区

### 1. 中央区（島之内地区）の概要

大阪市中心部も、人口に占める外国人登録者数が高く、総人口の8.46%（2020年12月）の外国人住民に加え、日本国籍を持つ外国ルーツの子どもたちが多数生活している。Minami こども教室のある島之内地区は、人口約6,000人のうち三割以上が外国籍住民である。比較的新しい外国人集住地区であること、所得階層間格差が大きいこと、繁華街・ミナミが徒歩圏内であることから、ミナミで飲食業に従事する外国人女性住民の割合が高いことが特徴である。

### 2. Minami こども教室設立のきっかけ

Minami こども教室の運営は「Minami こども教室実行委員会」である。実行委員会の設立のきっかけは、2012年に島之内の近くで起こったフィリピン人女性による実子刺殺自殺未遂事件である。非常に不安定な環境の中で働き一生懸命子育てをしていた母親が、孤立して精神的に不安定に

なった結果、小学校に入学したばかりの自分の子どもをあやめてしまった悲しい事件であった。「地域の中でこういったことを二度と繰り返さず、子どもたちが安心して暮らせるように」という思いから、学校が中心になり、移民の支援にかかわってきた人々や、教員、研究者、NPOの関係者などがメンバーとなってMinami こども教室実行委員会は発足した。現・実行委員長である原さんは当時、フィリピンでフィールドワークをしながら移民の研究をする大学院生であった。身近な大阪で、フィリピンからの移民である母親がSOSを出せずに暮らしていたことが「自分としてはめっちゃショック」で「無力さ極まりないっていう」思いから、同様の状況にある人々を支援するためMinami こども教室のボランティアに加わり、現在に至っている。

事件の翌年、2013年の9月、第一回目のMinami こども教室が開催された。当初は南小学校の中で開催していたが、地域とのつながりを濃くしていくため、中央区子ども・子育てプラザに開催場所を移した。さらにその後、子どもの人数が増えたことで、小学生部会と中高生部会に分かれて道仁連合会館と二か所で実施するようになった。設立から12年、かつて隣に座っていた子どもたちが大人になって顔を見せることもあるという。

### 3. Minami こども教室

#### 登録制：子どもの家族と家庭も支援する

Minami こども教室では、登録制をとっている。登録は本人が外国ルーツをもつ子どもであることを条件にしている。子どもたちの登録をする際には、必ず保護者と面談し、家庭の事情や困りごとがないか、必要なサービスにつながっているかということを確認している。子どもの困りごとは、

子どもだけに対応していても決して解決できるものではなく、家族も含めて対象とする必要があるからである。また、子どものアレルギーや宗教的な理由で食べられないものも登録時に必ず確認し、遠足など際の食事や連携するこども食堂「しま☆ルーム」での食事において配慮をしている。

2013年当初の登録者は10人であったが、今現在の登録人数は207人（2025年1月）に増加した。ルーツは、フィリピンが5割、中国が2割、ネパール1割のほか、韓国・タイ・ブラジル・ルーマニア・モンゴルなど多様である。なお、卒業や転居によって離れても、子どもの名前は登録名簿に残しておく。またいつでも居場所として受け入れるという思いからであり、実際に戻ってきて再び支援につながる子どももいる。

また、キャパシティの問題から、登録対象は中央区在住の子どもに限っている。区外住民からの問い合わせも多く、同様の支援を実施している他の団体につなげることができる場合もあるが、そうでない場合、心を痛めつつ断ることになる。そのため、各地でこのような活動を広げるべく研修や講演にも積極的に出向いている。

#### 小学生部会／中高生部会

Minami こども教室も、学習支援と日本語学習の両面のサポートをしている。道仁連合会館の2・3階で小学生が、近くの中央区子ども子育てプラザで中学生以上の子どもたちが学習をしている。毎週火曜日の18:00から1時間目、18:45から15分の休憩を挟んで、19:45まで2時間目として実施している。中高生部会については、普段は火曜日のみだが、秋ごろから受験期にかけては希望者が過去問を解くなどの受験対策を行う日を追加して設けている。近年では、「ダイレクト受験」の子どもも増

えており、特別枠の受験などのサポートも行っている。これらはすべて無償でおこなっており、寄付や助成金を資金源としてまかなっている。

学習内容は、子どもたちが学校の宿題や日本語教室で出た宿題を持ってきて、先生が隣についてわからないところを聞くという形で進めている。また、「Minami Fun Time」という対話的学習も導入している。学習以外にも、地域行事への参加や遠足などの体験活動を実施しているほか、月一回は絵本の読み聞かせをおこなったり、数か月一回外部講師によるジェンダーや性教育などいろいろなテーマでのワークショップも実施している。



小学生部会の様子



中高生部会の様子

## 子どもの隣で一緒に学ぶ

Minami こども教室では、ボランティアと子どもの1対1の学習支援を目指している。ボランティアが隣に座って勉強すると、子どもたちの集中力や学びを吸収する力は全く違う。子どもと一緒に「ちょっと難しいね」「私も調べるわ」というようにコミュニケーションを取りながら勉強することが居場所としての感覚を作っている。大人もわかっていない姿を見せることで「大人もわからないことがあるんだ」と子どもが思え、安心感につながる。また、学習以外のことで、なにか困ったことがあったり、伝えたいことがあったりしたときに、子どもたちが話せる関係性を築くこともできる。

## 実行委員・ボランティアによるかかわり

現在、20人の実行委員が活動している。ボランティアは、学生から大人まで幅広く募っているが、元教員や教員免許を持っている人もいる。先生と子どものマッチングは、子どもたちが勉強したい教科などを考慮しながら毎週都度おこなわれる。

毎週、活動後にはボランティアミーティングを行い、その日の子どもの様子などを共有しあっている。個々のボランティアが子どもの隣に座って細やかに関わることに加え、スタッフ間で情報共有がなされることでより多角的に子どもの様子を把握することが可能になっている。

参加する子どもの数もボランティアの数も変動がある中で、おおよそ1対1の学びができてるのは、毎月ボランティア説明会・見学会を実施してボランティア登録者を増やす取り組みを繰り返しているからである。登録にあたっては、ボランティア説明会・見学会で守秘義務や気を付けるべき発言などの基本的な行動規範や「わかりやすい日本語」<sup>1)</sup>について伝えようとして登

録を行っている。

また、ボランティア研修会（スタッフ研修会）が年に1、2回行われている。外部の講師に来てもらうなどして子どもたちへの接し方のアップデートを意識している。

実行委員会では、毎月運営会議を行うほか、小・中学校を入れたケース共有会議も2ヶ月に一回行っている。それぞれのケースへの対応について検討する機会であると同時に、支援者であるスタッフがしんどいケースを自分一人で背負い込まないようにする意味でも重要である。どのスタッフも別に本職がある中で子ども教室にかかわっているため、仕事との両立でしんどさを感じたり、対応が難しいケースで自らのふがいなさを責めてしまったりする人もいる。そのため、全員でフォローしながらやっていくことが非常に重要になっているという。

### 子どもの SOS を逃さないために

ボランティアが隣に座って勉強をすることを続けて、子どもとの関係性を築いたときに、子どもが悩みごとや相談事をぼろっと言ってくれることがある。言葉ではなく、勉強に専念できなかったり、体調がしんどそうだったりといった普段の様子との違いから伝わってくることもある。中高生は困りごとや悩み事について自ら言語化できることもあるが、小学生は言語化できない場合も多い。そのような子どもに対しては、声掛けをいつもより丁寧にするなどして気にかけている。

教室が終わるのは20:00頃になるため、小学生はスタッフが家まで送っていく。中には家でトラブルがあって居づらい子や、保護者が仕事で夜間不在にしている子も多いため、「まだ家に帰りたくないから、（自分を送る順番を）最後にして」とスタッフの手を握って訴える子もいる。この帰り道

もスタッフと子どもの間での重要なコミュニケーションの時間になっている。

子どもの様子が大変そうに見える時や SOS を出していると感じる時には、家庭訪問をしたり、あとで保護者に電話したりといった対応を行う。さらに、必要があれば、保護者の了承をとって学校に伝えたり、役所との連携も行う。

### 今後の人生における心の支えとなるように

学習支援と同様に大切にしているのが、子どもにとっての居場所であることである。「ここに来ればいつでも、自分のことをよく知っていて、気にかけている大人がいて、友達もやってきて、ひとときを一緒に過ごすことができる」場所をつくり、「ここはあなたの居場所だよ」と言葉でも雰囲気でも、小学生のうちから伝え続けることで、その子どものその後の人生における心のよりどころになってくれたらという思いが活動の根底にある。実際に、顔を出さなくなっても高校生になってからふらっと相談に訪れる子どももいて、心の支えになっていることを嬉しく思うこともあるという。

外国につながる子どものいる家庭では、他に頼れる親戚や知人が近くにいないことで親子関係が濃密になり、逃げ場がない環境になってしまうことも多い。子ども教室は、年齢的にも様々な人々とかかわる機会になる。遠足などではグループをあえて学年を縦割りにして、アクティビティに取り組ませることで、縦のつながりができるように意識している。そのような中で、子どもたちがロールモデルに思えるお姉さん・お兄さんができることもある。

家庭も学校も行きづらい時には、Minami 子ども教室の第三の居場所としての役割が、より重要になる。子どもたちは、それぞれの場所で自分のいろんな一面を使い分

けて見せながら育っている。家庭や学校では時に我慢しながら「いい子」の面を見せて過ごす子どもたちも、こども教室ではその一面から解放されて、にぎやかに過ごしている。

#### 教育支援と居場所づくりの間で

教育と居場所づくりの両立は簡単ではない。居場所づくりという観点では「来てくれるだけで二重丸」で、スマホをいじったりゲームしたりするとしても OK という考え方もできるが、勉強したい他の子のためにも勉強に専念できる環境を作ることも必要である。また、学校が中心となり子どもの教育を念頭に立ち上がった団体であるため、居場所としての重要性和同時に、今の年代の子どもたちに対応した形で学力向上や進学について改めて考えることが大事であるという意見も出ている。

そのように居場所づくりと学習支援との間のせめぎあいについて議論が重ねられている。例えば学習時のスマホの利用についてなど、大人が決めたルールに従わせるのでは子どもが嫌な気持ちになるため、必要な時には「子どもミーティング」を行い、子どもたちが自らルールを決めてそれを守るといった機会を設けている。

#### 4. 関連団体との連携

Minami こども教室では、非常に小さな組織でありできることが限られているという認識から、地域や他団体や行政、学校などとのつながりを非常に大切にしている。

##### 学校との連携

Minami こども教室の立ち上げ時から、子どもたちへの対応をするには学校が重要な役割を果たすと考えられており、実行委員会の一員としてケース会議などを通して

密な関係性を築いている。

外国ルーツの子どもたちが増える中、学校も対応に手いっぱい状況がある。Minami こども教室が関わる学校では、多文化共生の意識や日本語教育の必要性について理解している教員は多いと感じられている。しかし、日本語教育のための先生の配置が進んでも、子どもの人数の増加に追いつかなければ、1人ひとりへのサポートが十分とは言えない。

##### 子ども食堂「しま☆ルーム」との連携

Minami こども教室の翌日の水曜日には、同じ道仁連合会館で、子ども食堂「しま☆ルーム」が開催されている。食事は協力する近隣の飲食店が提供している。コロナ禍には弁当の配達を行い、2021年以降は、こども教室がしま☆ルームと連携して、食の支援やフードパントリーなどの取り組みも行っている。

Minami こども教室は、外国ルーツの子のための居場所として登録を外国ルーツのある子どもに限定しているが、しま☆ルームはルーツにかかわらず地域の子どもたちが参加することができる。高校生や大学生のボランティアに参加して居場所づくりもしているため、外国ルーツではないけれどもニーズがある子どもから問い合わせがある場合は、そちらにつなぐことで対応している。

##### 中央区子ども居場所連絡会

中央区近辺にある子どもの居場所団体と地域住民、企業などが力を合わせて子どもの未来を応援するために中央区社会福祉協議会を事務局とする連絡会が2019年に組織されたのが中央区子どもの居場所連絡会である。現在14団体が参画している。Minami こども教室・しま☆ルームは幹事

団体として参加しており、2か月に一度の会議を通じて情報共有や連携を行っている。特にコロナ禍には、メディアの影響もあり、大変な思いをしている人々を支えたい・協力したいという人々や団体が増えた。この連絡会を通して、そのような人々と団体につながり、現在の子ども食堂などの支援につながった。

### 地域との連携

小学生部会の会場である道仁連合会館は地域の協力により無償で借りている。島之内地区は、日本人、外国人問わず、住民の流動性が非常に高い。商売の町であり、商店の関係者の多くが地区外に住んでいたりと、マンションの取り壊し・ホテル開発が進んだり、あまり地域住民の顔が見えないという特徴がある。そのような状況で地域の子どもたちを誰が見るのか？という問題意識がこども教室の基盤になっている。地域のお祭りへの参加などを通して、「外国ルーツの子どもたちがここの地域で暮らしてるんだよ」と伝えることを心掛けている。

## 5. その他の活動

### 大人の日本語教室

月2回日曜日に同じ場所で、日本語能力試験の合格を目指す大人のための日本語教室も行っている。コロナ禍で飲食業が思うように続けられなくなったことから、転職を考える際に履歴書に記載できる資格が必要だという声が保護者たちから上がり、それがきっかけとなった。日本語教師の資格を持っているスタッフが担当している。

### 相談事業

Minami こども教室が行われているとき、隣の部屋では、大人のための相談室が毎週火曜 17:00 から 20:00 まで設けられ

ている。要望に応じて他の曜日・時間に相談を受けることもある。また、日本語での日常会話には問題がない人であっても、行政上の申請書類の記入などに困難がありサポートが必要な場合があるため、役所に同行したりといった対応もおこなう。相談員は社会福祉士などのスタッフが担い、相談員に対応しきれない法的な側面に関しては、弁護士や司法書士など、専門職との協力によって対処する。なお、この相談事業は大阪市中央区の委託助成を受けて実施している。

受ける相談内容としては、教育相談のほか、福祉相談として、金銭面の問題、離婚の問題、地域での交わりの問題、DVの問題、虐待の問題、医療へのアクセス問題などに幅広く対応している。例えば医療へのアクセス問題については、金銭面や在留資格の問題などで医療につながる事が難しい外国ルーツの人々がいることが問題になっている。身体を酷使して働いている方が多く、医療につながっていなかったり、不調があっても市販薬で済ませたりして通院していないケースもある。そのような状況が続くことで、Minami こども教室の保護者でも 40代・50代の若さで倒れて亡くなってしまうケースがあった。そのあとの生活再建はもちろん、子どもたちへの精神的な負担も大きい。このような医療へのアクセスについて、どうサポートしていけるかは大きな課題となっている。

相談しやすい環境をつくるため、割合として多いフィリピンルーツの方にはフィリピン人の実行委員が隔週で対応するほか、予約がある場合には可能な範囲で相談者の話す言語に対応できる通訳を探す。中国語の場合は、中国語話者のボランティア（中にはこども教室で学んだ大学生もいる）に謝金を支払って通訳に入ってもらうことも

ある。

相談事業は以前から行っていたが、コロナ禍で相談が急増し、相談員を増員して事業として対応するようになった。コロナ禍では、保護者の多くが働いている繁華街・ミナミが緊急事態宣言による営業停止の影響で経済的打撃を受けた。現在、相談数は落ち着いたが、外国ルーツの人々が置かれている社会的・経済的な問題は今も根本的には解決していない。

なお、相談の受付は子ども教室に来る子どもの保護者には限っていない。役所が閉まっている時間に無料で相談をすることができる相談室であることから、口コミで様々な人々が来る。そのように公的な相談の場から漏れた人々の相談場所として機能している側面もあり、「島之内地域のワンストップセンター的な感じ」になっている。

## おわりに

いずれの事例も、大人が対等な立場で一



食事を用意して  
もらえない

障がいや  
病気があ  
る家族の  
ケアをして  
いる

こどもだけ  
で留守番を  
している

日本語が  
にがてな  
な家族の  
選択をして  
いる

家計を  
ささえるた  
めに  
はたしている

誰のかわりに  
弟や妹の  
世話をし  
ていて

両親になつ  
ても  
簡単に  
つれてい  
って  
もらえない

学校でひつ  
つような  
ものを  
用意して  
もらえない

習字やせん  
たく、  
さうじを  
まかされて  
いる

おじ  
ちゃん  
おばあ  
ちゃん  
の見守  
りや  
お世話を  
している

お家のことでこまったら LINE してね

**Minami子どもケアLINE**

【令和5年度大阪府市民活動推進助成事業】＊利用は無料です  
相談できる人：大阪府に居住している18歳以上の子どもと保護者  
LINE相談できる時間：月・水・金요일午後2時～10時  
相談員とあって相談できる時間：毎週火曜日・水曜日午後5時～8時  
ばしよ：道に道合会館（大阪府中央区島之内2-12-19）  
運営団体：Minami子ども教室 電話 070-1816-3730

2022年より、LINEでの相談も受け付けている  
(子どもケアLINE)  
(画像出所) Minami子ども教室ホームページより。

人の子どもに細やかにかかわる学習支援・居場所づくりがおこなわれていた。そうすることで、学習面だけではなく、子どもたちの抱える悩みや困難についてもコミュニケーションをとることができる。どちらの事例でも、このように子どもたちの学習をサポートする場所、子どもたちの居場所となる場所が他の地域にほとんどないことで取りこぼされてしまう子どもたちがいることが課題であるとおっしゃっていた。このような（外見ではわからない様々な背景をもつ）外国につながる子どもたち・外国ルーツの子どもたちがいること、そしてその子どもたちをサポートする団体があることを私たちはどれだけ知っているだろうか？子どもたちと、子どもたちを支えるスタッフへの配慮がなされたこのような環境をつくり維持することは決して簡単なことではないと思われるが、関心をもつ人々が増え、このような場所がもっと増えることが今後間違いなく必要である。

また、取材中には、不安定な雇用形態、経済的な困難とそれに伴う子どもの「経験的の貧困」、ヤングケアラーの問題、医療へのアクセスの問題、多言語相談窓口の必要性、行政文書等における「やさしい日本語」の必要性など、様々な社会的・制度的な課題についての言及があり、これらへの対応も早急に求められている。

本稿では大阪の事例を紹介した。大阪は外国につながる子どもたちの教育に関する取り組みが比較的進んでいる地域である（もちろんそれは、その取り組みを必要としている子どもたちとその家族がそれだけ多いということの裏返しでもあるし、取り組みが進んでいても支援が必要な子どもが増える中で十分な機会が備えられているとは言えない現状もある）。その一方で、大阪とは異なる状況にある、外国につながる

子どもが散在している地域における課題についても考えていく必要があるだろう。

また、本稿では深掘りすることができなかったが、外国につながる子どもたちの教育をめぐる<sup>2)</sup>は、不就学への対応<sup>2)</sup>や、日本語を母語としない生徒のための高校入試特別措置・特別入学枠の整備<sup>3)</sup>など、解決すべき課題が他にもたくさんある。

今後、外国につながる子どもたちの人数がさらに増えることが予測される。どの子どもたちも学びを通して自らが望む未来へ進む可能性を秘めている。同じ社会で暮らす私たちはその子どもたちと無関係ではない。どの地域においても、子どもたちの学習機会や暮らしを守る取り組みがより強く求められる。

### 〈謝辞〉

本稿の執筆にあたり、快く取材に応じてくださりました IKUNO・多文化ふらっとの藤井和代様・金和永様、Minami こども教室の原めぐみ様をはじめとするそれぞれの団体の関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。また、本文中で十分に記載できなかった地域の歴史的背景についてお話をくださったコリア NGO センターの郭辰雄様にもあわせて深く感謝申し上げます。

なお、それぞれの団体への寄付の情報について巻末「事務局だより」に記載しています。また、活動に賛同し継続的に関わるボランティアの募集もあります。下記の各団体のホームページをぜひご覧ください。

### 〈関連URL・参考文献〉

IKUNO・多文化ふらっと <https://www.ikunotabunkafat.org/>

Minami こども教室 <https://minami-kodomo.org/>

コリア NGO センター <https://korea-ngo.org/>

駐大阪韓国文化院とコリア NGO センターによる

韓日交流の痕跡を辿るオンライン散策<大阪コリアタウン> (6部作の映像) <http://osakakorea.com/onlinefieldwork2021/>

荒牧重人、榎井縁、江原裕美、小島祥美、志水宏吉、南野奈津子、宮島喬、山野良一編 2022 『外国人の子ども白書：権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の視点から (第2版)』 明石書店。

玉置太郎、2023 『移民の子どもに座る：大阪・ミナミの「教室」から』 朝日新聞出版。

毎日新聞取材班編、2020、『にほんでいきる：外国からきた子どもたち』 明石書店。

山本晃輔、榎井縁編著、2023 『外国人生徒と共に歩む大阪の高校：学校文化の変容と卒業生のライフコース』、明石書店。

### 注

- 1) 「はさみの法則」、つまり「はっきり」「さいごまで」「みじかく」。取材時には次の動画の紹介もあった。やさしい日本語ツーリズム研究会 \_やさしい日本語ラップ「やさしい せかい」(Multilingual subtitles) <https://www.youtube.com/watch?v=2fYxhoUwqAg>
- 2) 憲法解釈上、憲法で定められている(保護者に対する)就学義務が外国人には適用されない。日本が締結している国際人権条約でも子どもの権利条約でも、子どもが教育を受ける権利を保障することが求められているが、実際には外国籍の不就学の子どもについては何の対応もされず放置される場合があるのが実情である(荒牧ら 2022)。
- 3) 特に在留外国人の多い自治体で、日本語を母語としない生徒のための特別な高校入試措置(問題文の漢字へのルビ打ち、試験時間の延長といった特別措置や、特別入学枠の設置など)が導入されつつあるが、制度の内容にはばらつきがあり、十分な対応ができている場合は少なく、制度の整備が求められている。